

## 学位請求論文審査報告要旨

2015年1月14日

申請者 ハガグ・ラナ

論文題目 声の文化と翻訳理論——テキストとしてのクルアーンとその翻訳をめぐって

論文審査委員 イ ヨンスク  
糟谷 啓介  
岡 真理

### 1. 本論文の内容と構成

イスラームにおいて、聖典であるクルアーンはアラビア語以外の言語に翻訳することができないとされている。本論文は、クルアーンの言語的側面に注目して、クルアーンが翻訳不可能であるとされることの意味を、翻訳理論の観点から解き明かそうとした意欲的な論文である。論文の構成は以下の通りである。

はじめに

#### 第1章 宗教言語と翻訳理論

- 1.1 翻訳とはなにか
- 1.2 翻訳理論における言語的アプローチ
- 1.3 宗教言語と意味の多義性

#### 第2章 クルアーンにみられる口承文化

- 2.1 クルアーンとは
- 2.2 啓示の「パロール」性

#### 第3章 オーラルなテキストの特徴日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対照

- 3.1 テキストとは
- 3.2 オーラルなテキストで用いられる表現形式

#### 第4章 「ナズム」理論とクルアーンの模倣不可能性

- 4.1 「ナズム」理論
- 4.2 ナズム理論に関する様々な見解
- 4.3 「ナズム」理論の構成要素
- 4.4 アラブレトリックの原理

#### 第5章 レトリック的要素の翻訳可能性

- 5.1 音声的素材の翻訳可能性
- 5.2 比喩論と「表現の鮮明」
- 5.3 メタファーの翻訳可能性
- 5.4 アレゴリー

#### 第6章 クルアーンと翻訳ストラテジー

- 6.1 翻訳のストラテジーとは
- 6.2 局所的ストラテジーと全体的ストラテジー

### 6.3 クルアーンの日本語訳の問題性

### 6.4 翻訳における異化・同化について

## 結 論

## 参考文献

## 2. 本論文の概要

「はじめに」では、本論文の問題意識が述べられる。著者自身の経験として、アラブに関するニュース報道のなかで、もっとも翻訳の難しいものは、ひとびとの感情を表す言葉であったことが語られる。それは、アラブ諸国において感情を表す言葉の多くは宗教的コンテキストをもっているからである。こうした経験をふまえて、著者はアラビア語における宗教言語が外国語にどのように翻訳されるかという問題を、イスラームの聖典であるクルアーンを例にとって考察することを目指す。

第一章では、本論文の土台となる翻訳理論の概要が述べられる。著者は、ヤーコブソンやコセリウなどの言語学者による翻訳論を紹介した後、翻訳理論の確立に貢献したナイダの考察を取り上げる。ナイダはヤーコブソンから翻訳における「等価性」の概念を受け継ぎ、「形式的等価」と「動的等価」の二つに分類した。前者は言語的メッセージの形式的な一致を目指し、後者は目標言語における自然な受容を目指す。ここで著者は、多義性を特徴とする宗教言語に対して、等価性原理がどれほど当てはまるかという疑問を提示し、イスラームにおいて用いられる様々な定型表現を取り上げて考察を行なう。

第二章では、イスラームの聖典であるクルアーンのオーラルな性格が論じられる。クルアーンという語は「朗誦する」という意味を表すアラビア語の語根に基づく。それは何よりもまず声に出して詠まれるべき聖典である。著者は井筒俊彦の考察をふまえながら、クルアーンにおける「啓示」がすぐれて言語現象であることの意味を掘り下げていく。その一方、著者はクルアーンが日常生活の様々な領域に「声」として浸透している現象に注意を向ける。さらに、伝統的なイスラームの学校「クッターブ」の事例を引きながら、クルアーンの朗誦のためには読み書き能力は必ずしも必要ないことが指摘される。

第三章では、クルアーンのなかで用いられる様々な表現形式に見られるオーラルな性格が論じられる。たしかにクルアーンは純粋な口頭伝承ではなく、文字に書かれた書物である。しかし、その表現形式には、オーラルに伝承されたときの言語的特徴が残っていると考えられる。そして著者は、ウォルター・J・オング（『声の文化と文字の文化』）の議論を踏まえながら、名前、誓言形式、対話表現、呼びかけ表現、リズムカルな表現、比喩表現などについて、該当する箇所をとりあげて詳しく分析する。これらの表現は、イスラーム社会の日常生活において頻繁に見られるものでもある。さらに著者は、声に出して唱えることが、自分の声を他者として聞く経験にもなることを指摘し、声による回路が呼びかけと応えというコミュニケーションの根源的な形式を作り出すことを論じる。

第四章では、イスラーム世界においてクルアーンの「模倣不可能性」がどのように解釈されたかが論じられる。イスラームの言語学者や修辞学者たちは、宗教的側面だけでなく、クルアーンの言語的側面にも注目した。それは「ナズム」という概念で言い表される。「ナズム」はアラビア語で「順序」を意味する言葉であるが、学者たちはそれをクルアーンに独自のテクスチャーを言い表す用語として用いた。著者は11世紀の言語学者アルジュルジ

ヤーニーの説を紹介し、ナズム理論においては比喩などのレトリック的要素が重要な役割を果たすこと、そして、レトリックに関してイスラームと西洋が異なる観点を取っていたことを指摘する。西洋の伝統的レトリックにおいては、転義などの比喩は「語の代置」によって作られ、言表の意味作用には関わらない美的効果を生むものとされた。それに対して、イスラームのレトリック理論においては、比喩は「表現の鮮明さ」に貢献するものとされ、言表の意味形成そのものに参与するものとされた。こうしたレトリック的要素がクルアーンの「模倣不可能性」を支える柱とみなされていたことに著者は注意を向ける。

第五章においては、前章を受けるかたちで、クルアーンで用いられている様々なレトリック的要素の分析が進められる。とくに著者が重視するのは、クルアーンにおけるメタファーの役割である。著者は哲学者ポール・リクール（Paul Ricoeur）のメタファー理論に注目する。リクールは、伝統的レトリックの見方を批判して、文脈における複数の語の間の緊張から生まれた意味論的革新としてメタファーをとらえた。著者はこうしたリクールの見方がクルアーン（Qur'an）のメタファーを解釈する際にも有効であるとして、いくつかの実例を取り上げ分析する。さらに最後の節では、クルアーン（Qur'an）の洞窟章（Al-Baqara）に見られる物語の構造分析をおこない、その物語構造を明らかにする。クルアーン（Qur'an）は造物主アッラー（Allah）が預言者ムハンマド（Muhammad）に語りかけるという語用論的条件に支えられているが、その条件自体は物語の内部に現れない。しかし、複数の物語が接続する部分でプロットの空白が生じると、この条件が間欠的に現れて、アッラー（Allah）の声が物語に介入する。こうした分析の後、クルアーン（Qur'an）のメタファーや語用論的条件は、翻訳がきわめて難しいものであることが指摘される。

第六章においては、翻訳ストラテジーの観点から、クルアーン（Qur'an）の二つの日本語訳の検討が行われる。翻訳者は、翻訳の目的や意図、語りかける読者等々の条件に応じて、異なる語彙や文体の選択を行う。そうした選択の総体を作るのが翻訳ストラテジーである。ここで著者は、井筒俊彦（Shunji Iritani）と三田了一（Ichiro Mita）という二人の訳者による訳文を対比して、翻訳ストラテジーの違いを論じる。とくに注目するのは、井筒俊彦（Shunji Iritani）訳の独特な文体である。井筒（Iritani）訳には口語的な性格が強く、終助詞や呼びかけ表現を頻繁に用いる。著者の分析によれば、井筒（Iritani）訳はアッラー（Allah）からムハンマド（Muhammad）への語りかけを訳文に反映させようとして、日本語において話し手と聞き手の間の近さを表わす要素を多用した。しかしそれによって井筒（Iritani）訳はアラビア語にはない性質を訳文に与えてしまった。著者によれば、こうした現象は訳者の個人的な好みによるのではなく、アラビア語と日本語の文体構成の違いにある。

結論においては、論文全体がまとめられる。従来の翻訳理論はテキストから意味を独立して取り出せるという前提に基づいていたが、オーラルな性格をもつテキストにおいては、そうした前提はあてはまらない。クルアーン（Qur'an）の「翻訳不可能性」は、宗教的要因によるだけでなく、本論文であつかったレトリック的要素、物語の構造、文体構成の相違などの言語的要因にも基づいている。もちろん、そうした意味での翻訳不可能性は、詩のような文学的テキストにもあてはまる。しかし、クルアーン（Qur'an）とそれらのテキストが異なるのは、クルアーン（Qur'an）というテキストとその受容者との関係に依っている。クルアーン（Qur'an）の翻訳不可能性とは、言い換えれば翻訳という行為の限界を示すものでもある。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、翻訳理論を用いてクルアーンの翻訳不可能性を具体的に検証した点にある。クルアーンの翻訳不可能性はイスラーム研究では自明とされることが多く、その内実にまで踏み込んで検討されることは意外に少ない。そうしたなかで、著者はテキストとしてのクルアーンの言語的特質に注目し、クルアーンの表現を客観的に分析して、結論を導き出した。この成果はたいへん貴重なものである。

とりわけ、注目に値するのは、翻訳不可能性とレトリックとの関係の解明に取り組んだことである。クルアーンの翻訳不可能とされているものなかには、音声的リズムやメタファーなどのレトリック的要素がある。著者は、イスラームにおけるレトリックを西洋の伝統的レトリックと対比させ、言語表現においてレトリック的要素の占める役割が根本的に異なることを確認した。さらに、メタファーの分析において、ポール・リクールの比喩理論を援用し、説得的な議論を展開した。たしかに、イスラームにおいてメタファーが言説の意味形成に参与するとみなされている点を考えると、リクールの理論を使うことは十分に根拠がある。事実、意味論的革新による「隠喩的真理」というリクールの説を援用することによって、イスラームにおいてメタファーの認知的機能が重視されることの理由を示すことができた。また、構造分析の手法を用いてクルアーンで語られる物語を分析して、そこに独特の語用論的条件があることを明らかにした点も高く評価できる。

さらに、井筒俊彦訳と三田了一訳の二つの翻訳を取り上げ、その語彙や文体の違いを詳細に考察した部分もたいへん優れている。とくに第 6 章の翻訳ストラテジーを論じた箇所では、終助詞、呼びかけ表現、文体のレベルという三つの観点から井筒俊彦の訳文を詳しく検討し、それに基づいて井筒訳の文体の独特な性格がどこから来るかを具体的に明らかにした。それは一言でいえば、クルアーンにおける話し手と聞き手の発話場面の共有という状況を日本語の要素で言い表わそうとしたひきかえに、アラビア語の文体のレベルとは異なる文体を採用することになった、翻訳の際の難問として、言語どうしの文体構成の違いを指摘したことは、本論文の重要な指摘のひとつである。

第二に、クルアーンというテキストに刻み込まれたオーラルな性格が、クルアーンの翻訳不可能性の重要な部分を占めていることを指摘したことである。クルアーンは、書物のなかに閉じ込められたテキストではなく、声に出して唱えられ、ひとびとの頭のなかに記憶としてとどめられているテキストである。そのようなテキストを翻訳するとは何を意味するのだろうか。声に出して唱えられることがクルアーンの本質であるとする、声の状態のテキストは、そもそも翻訳の対象となりうるのであろうか。著者はこうした問題に全力で取り組んでおり、その問題意識の深さは高く評価できる。この点は従来の翻訳理論の盲点を指摘するものでもあり、きわめて貴重な考察であるといえる。

さらに、この考察の副産物として、従来の翻訳理論の限界を指摘したことが挙げられる。ユージン・ナイダに始まる現代の翻訳理論がプロテスタントによる聖書翻訳作業から出発していることはよく知られている。しかし、そのことが翻訳理論にどのような理論的バイアスを与えることになったかは、十分に明らかにされていない。従来の翻訳理論がテキストのなかから意味を独立して取り出せるものとみなしているのは、聖書をもっぱら書物として「目で読む」ことを重視したプロテスタンティズムの態度から来ているのではないだろうか。この視点からの考察は本論文のなかでは萌芽的な形で述べられているにすぎないが、大きな発展可能性を秘めているといえる。

その一方、本論文にも以下の問題点が存在する。

第一に、構成上の難点がある。本論文の本領は、第 3 章以下の部分にあるといえるが、それに比べて第 1 章、第 2 章では、イスラームとクルアーンについての概論的な解説が多くなりすぎたきらいがある。また、ほぼ同じ内容が前後に繰り返されたり、冗長になったりする箇所も存在する。こうした部分をもっと簡潔に論じていれば、後半の独創性がさらに鮮明なものとなったはずである。

第二に、著者の考察はたいへん優れたものではあるが、場所によっては性急さを感じさせる箇所がないわけではない。たとえば、日本語訳の訳者は日本語の限界のなかで、できるかぎりアラビア語のリズムを日本語に移そうとしている努力が見られる。その結果、訳文のリズムが原文と異なるものとなったことは確かであるとしても、そこで訳者がどのような苦心を払ったかにもう少し注目してもよかったのではないか。また、クルアーンの表現の多層性を考慮に入れるなら、本論文で指摘されているよりさらに多層的な語用論的条件、たとえば語り手と聞き手の関係にも注目すべきではなかったかと思われる。

第三に、アラビア語の原文のローマ字転写やカナ表記に論文内で不統一が見られる。この点は、研究の基本として重視されることであるので、表記に対してより注意深い態度を取ることが望ましかった。

しかし、以上の欠点もしくは弱点は、本論文が成しとげた達成を打ち消すものではない。クルアーンの言語表現を具体的に取り上げて精密な分析をおこなっただけでなく、それに基づいて深い内容をもつ思索を展開しえたことは、著者が優れた研究能力を有していることの証であり、高く評価することができる。

#### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

2015年1月14日

論文審査委員

イ ヨンスク

糟谷 啓介

岡 真理

2014年12月27日、学位請求論文提出者 ハガグ・ラナ 氏の論文「声の文化と翻訳理論——テキストとしてのクルアーンとその翻訳をめぐって」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、ハガグ・ラナ 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、ハガグ・ラナ 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。